

[市民公開講演]

佐倉と順天堂の人びと

酒井 シヅ

順天堂大学医学部

順天堂は1838(天保9)年、3年間の長崎遊学を終えて江戸に帰った佐藤泰然によって江戸薬研堀に創設された。そのころ、泰然は和田姓を名乗っていたことから、蘭学塾は和田塾といった。そこには開設当初、長崎時代の遊学から行動を共にしていた林洞海、三宅良斎が同居して、塾の運営にあっていたので、江戸での評判はかなり高かった。また、和田塾には蘭書、和医書の蔵書が多かった。蔵書には「和田文庫」の蔵書印が押されていたが、「和田文庫」の押印がある古医書がいまでも残る。林洞海がそれらを使って『ワートル薬性論』(天保11年)を出したことは周知の通りである。

和田塾盛況の様子は1840(天保11)年1月2日の泰然の父親佐藤藤佐の郷里に宛てた手紙にも書かれている。「倅追々手広に相成、当時御屋敷方十軒余立入仕、右之内六軒様より六十人扶持余金百両宛年々頂戴 衣類は反物その他にて家内一同之着類には余り候……」といろいろな御屋敷に出入りしている様子を伝えている。

また、天保13(1842)年、のちに泰然の養嫡子となった佐藤舜海(尚中)は、当時の江戸で和田塾が外科随一という評判から、それまで学んでいた安藤文澤の勧めで和田塾に入門したのであった。

ところが、1843(天保14)年8月、佐藤泰然は和田塾を林洞海に任せて、佐倉に移住した。林洞海(1813-1895)は豊前小倉の出身で、泰然が蘭医足立長雋に師事していた天保5年の頃に知り合い、泰然が長崎留学するのを知って、自分も長崎に行く、同行した仲であった。江戸に戻ると、洞海は和田塾で泰然を助けたが、この頃、訳し終えた「ワートル薬性論」で得た資金をもって、天保11年に再度、長崎に出かけ、天保14年6月1日に江戸に戻った。程なく、泰然は佐倉に移住するが、その前後に洞海は長女つるを娶り、泰然の佐倉移住後の和田塾を継いだのであった。

泰然が佐倉に移住した理由について、いくつか憶測されているが、決定的な説はない。一つは、泰然が天保10年5月、蛮社の獄で捕らわれた渡辺崋山、高野長英らと親しかったために、身の回りが危うかったという説がある。事実、蛮社の獄が起きる直前同年4月に町奉行の鳥井甲斐守耀蔵の手下小笠原貢蔵が蘭学者の動向を探って上申した手控えに、長崎帰りの和田泰然が高野長英の『夢物語』を所持していると記してあった。しかし、佐倉へ移るのは蛮社の獄から4年後である。

また、一説は、父、佐藤藤佐が郷里庄内藩の転封事件の重要人物であったことから、老中の水野忠邦の怒りに触れていたことが、泰然が佐倉に行ったことと関係しているという説がある。しかし、事件の当人の父藤佐がその後も泰然の弟とともに江戸に住み続けたことから納得できない。そのほかにもいくつかの説があるが、泰然自身、自分のことについてほとんど書き残していないから判明できない。

また佐倉に移住する直接のきっかけを誰が作ったのかについても決定的なことはわからない。佐倉藩の家老渡辺弥一兵衛の誘いであったといわれている。渡辺弥一兵衛は背中の瘍を蘭方医に治して貰い、蘭方の力を信じていたので、日頃、佐倉藩に蘭学を取り入れたいと願っていたのは確かである。

ところで、泰然が佐倉に移る決意をしたのがいつか、定かでない。泰然が佐倉に移住したのが天保14年8月ということが渡辺弥一兵衛の記録から確かである。しかし、天保14年4月に泰然が佐倉に土地と家を買って求めた証書がある。佐倉移住が8月になったのは、林洞海が6月1日に長崎から戻ってきて、後顧の憂いなく江戸を去ることができのを待っていたのではあるまいか。

佐倉藩は藩主が堀田正睦(1810-1864)の時代である。堀田正睦は文政8年に封を襲い、11万石の藩主

であった。堀田正睦は天保6年に西ノ丸老中になり、12年に3月に本丸老中になったが、同14年9月に辞任していた。その直前に泰然は佐倉に移住して、藩の客分の身分で、佐倉藩医をつとめ、同時に城下のはずれに順天堂を開いて蘭学を教え、治療を行った。泰然が佐倉藩に来たのは、渡辺弥一兵衛の誘いもさることながら、堀田正睦の魅力が大きかったのではないだろうか。

泰然が江戸で開いた和田塾は、藤佐は泰然のために大金をはたいて御家人株を買った家であった。それを弊履を捨てるごとく、江戸を去ったことに父藤佐はひどく怒った。その怒りを十分知っていただろう。しかし、佐倉に移ったのは、泰然が長崎で学び、蘭学者仲間で語り合った西洋事情を西洋堀田と渾名のある正睦を通して得る期待があったに違いない。

佐倉藩では堀田正睦の藩政のもと、藩の風紀刷新を目指して天保の改革を行っていたが、それが軌道に乗ってきた時期に泰然は客分になった。その仕上げに加わり、正睦の信頼を得ていった。

順天堂では、山口舜海（佐藤尚中）が門人の中でも信頼を得て、リーダーシップをとる様子が嘉永年間の手術記録『順天堂実験』から読み取れる。舜海（尚中）は泰然の養子になって次世代の順天堂を担っていった。

ところで、佐藤泰然には男子5人女子4人いた。実子は泰然の後継者にならず、男子はさまざまな分野で活躍した。中でも次男の松本良順、五男の林董の活躍は常人の域を超えていた。女子は長女が林洞海に、次女きはは三沢良益に、三女とみは白戸隆盛に、4女ふさは山内作左衛門にそれぞれ嫁している。その子孫はいずれも明治になって各界で活躍した華麗な一族である。